

忘れられない患者さまとの出会い



看護学科5期生 阿部 なつみ

「どうして助産婦になりたいと思ったの？」と患者さんから聞かれたことがあります。それは私が看護学科3年の4月、母性看護学実習を行っていたときでした。先ほどの質問を投げかけた患者さんは、母性看護学実習で受け持たせていただいた褥婦さんでした。

ある日、私が訪室すると、彼女は泣いており、どうしたのかと尋ねると、あるスタッフに授乳の事で傷つくことを言われた、と。「言葉って難しいね、患者さんに接するときはその人のことを考えて話をしたほうがいいよ」と彼女は私に言ってくれました。そしてコミュニケーションをとっていく間に、私が助産師を目指しているという話したことを覚えていたようで冒頭の質問を問いかけてきたようです。

私は、生命の誕生に立ち会える素晴らしい職業であること、望まない妊娠による人工妊娠中絶で尊い生命を絶つという悲しい行為をなくす為に関われる職業であると思ったこと、全ての女性の味方となり、支えになりたいと思い助産婦を目指したことを彼女に話しながら泣いてしまったことを覚えています。すると彼女は「そういう、一番最初に助産婦になりたいと思った自分の気持ちを忘れないで。いい助産婦さんになってね」と言ってくれました。

その言葉は私にとって忘れられないものとなりました。1人の患者さんが学生である自分としっかり向き

合って話をしてくれたことをうれしく思いました。

スタッフに厳しいことを言われた彼女、産後はとくにホルモンの関係でブルーになりやすい時期。どんなに心細かったことでしょう。

助産師として、母親となる人のそばに寄り添い、見守り、励まし、支えになりたい、力になりたい。そう思いました。その気持ちを改めて思い出させてくれた褥婦さんに今でも感謝していますし、彼女のことは一生忘れないと思います。

看護学科を卒業し、その後専攻科助産学専攻へ進学。現在は助産師として勤務し三年目となりました。まだまだ日々勉強の毎日ですが、楽しいです。もちろん楽しいことばかりではないけれど、やりがいがあり、充実した日々をすごしています。出産には一人一人ドラマがあり、経過もそれぞれ違いますが、新しい生命をこの世界に送り出すという一大イベントに立ち会い、元気な産声を聞いたときは感動しますし、母児ともに無事に出産を終えることができた安心感もあります。

これからも妊娠期から産褥期の周産期看護を行ううえで、母親となる人、また母親になった人の抱える不安やストレスなどを理解し、母親がこどもを愛し、自分に自信を持てるよう、思いやりを持った援助をしていきたいと思っています。